を摑んだら、場合によっては俺は押しかけてしまうだろう。それがリチャードを致命的な窮地に陥らせないとも限らない。でも真逆の可能性もある。どうしたらいい？　そもそも電話がつながらなかったら？　頭は悪いことばかり考える。

「あの」

はっとした。いけない。数秒、隣に人がいることを完全に忘れていた。すみません、と俺が早口に詫びると、加藤さんは首を横に振った。とても優しい目をしていた。

「こんなことを言うのは差し出がましいんですが……俺でよければ、少し、お話をうかがいます。もちろん言いたくないことを、無理に言ってほしいと言っているわけじゃなくて、なにか……そうですね、井戸みたいなものになれたら」

「井戸？」

はい、と彼は頷いた。

「井戸に顔を突っ込んでおしゃべりすると、自分の声が井戸の中に反響するでしょう。山の上で叫ぶよりもプライバシーの守られる場所で、でも声が広がってゆくような気分になれる。そういう存在になれたらなあって……」

「カウンセラーとか目指してらっしゃるんですか」

「そ、そうかも、しれないですね、はい」

この人はあまり隠し事がうまくないのだな、と思いながら、俺は少し笑った。大学を卒業したばかりくらいに見える青年の将来を、ちょっとだけ応援したい気持ちになったのも

「何でも構わないぞ。俺は今午後の一杯でいい気分になってるところだからな」

「お二人はワイン？　ジュースにおまかせなんですか？」

「えええまあ」

ガビーさんはサングラスを飲んでいた。加藤さんはあたたかいコーヒーを。俺はミネラルウォーターの瓶をルーズレーブ。っていうか時に「水でいいか」と判断してしまうと、こうが、だいたい誰かに似てきていると、この前シャトゥルさんに言われた。

俺たちはしばらく、当たり障りのない話題で盛り上がっていた。フィレンツェの街がきれいだということ、地球温暖化のせいで春が夏みたいに暑くて困るということ、イタリア料理がおいしいこと。だが突然。

「ちょっと」

ガビーさんが話を中座し、俺の前に指を一本立てた。何だろう。

「中田サン、顔を貸してもらっていいですか」

「か、かおですか？」

「……何て言うんだったかな、日本語で。そうだ、『あっかんべー』してください」

「えええっ」

とはいえこれだけ海外生活が長いとそれなりの無茶ぶりはされてくる。踊ってよ。歌ってよ。私の主人とカラオケのボーズをとってみてよ。もう何でも来いだ。

俺は渾身の力であっかんべーをしてみたが、ガビーさんは「舌は出さなくていいです」

「いや、そういうわけじゃ……あの、そうなのかな……ぼんやりしていて」

「お日さまを浴びすぎたんでしょうか」

「……そういうことか。今日はちょっと日差しが強いから」

そういうことはない、熱中症のなりかけだったのだ。

彼がぼんぼんと俺の背中を叩いてくれた時、何だか背中のあたりにわだかまっていたものが少し晴れたような気分だ。いわゆる拝み屋さんと、陰陽師とか、そういう人に背中を叩いてもらったような気分だ。でもまだまだやはり残っている。それはそうだ。今日の俺は捨て犬の中田正義なのだから。

怪しげな店に連れ込まれるコーヒーであればと走って逃げようと思ったが、彼が俺を連れ行ったのは、最寄りのカフェのテーブル席だった。南欧系の甘い顔立ちをした、少し癖のある黒髪の男性が、ようと俺たちに手を上げる。どうやら俺を待ってくれた人のお連れさまらしい。腰かけた状態ではあるが、背が高そうだしガタイもよかった。この人と殴り合うことになったら、片付けるまでに多少時間はかかるだろう。友好的な相手であることを祈る。

「申し遅れました。俺は加藤悟です。こちらは友人のガブリエーレ」

「ガビーでいい。どうも」

「中田正義です。お邪魔してしまっていいんですか」

「もちろんです。ガビー、日本語で話していい？　ガビーは四分の一日本人なんです」

フィレンツェ。フローレンス。花の都。

さまざまな名前で呼ばれる古都を、俺、中田正義は革靴でさまよっていた。道に迷っているわけではない。ただ、市街全部が世界遺産で、日本のテレビ番組でもしょっちゅう特集される『あのフィレンツェ』を、ぶらぶらしてみたかっただけだ。

どうせ今日はやることがない。

俺がイタリアにやってきた理由はシンプルで、麗しの上司リチャード・ラナシンハ・ドヴルピアン氏の仕事の同伴である。荷物持ちや雑用や、最近そこそこ流暢になってきたイタリア語の実地演習、現地周遊つき。仕事の予定は二日後からで、最初の二日はトスカーナ州の名所旧跡の探訪に費やせる。リチャードとイタリア観光だ。

そのはずだったのだが。

その初日の今朝、俺はリチャードに「やっぱり来なくていい」と言われてしまった。

リチャードは慌てふためいた様子で、俺をホテルに置き、一人で革のスーツケースだけを転がして出て行ってしまった。夕方には戻ります、と言い置いてゆくのを忘れずに。

やっぱり来なくていいって。やっぱり来なくていいって何だよ。今まで俺に一度もそんなことを言わなかったじゃないか。来なくていいって何だよ。それはもちろん、今の俺の立場はアルバイトの中田正義ではなく、学生の中田正義でもなく、リチャードの仕事を手伝うビジネスマン中田正義であるわけだが、今回の扱いは俺がどの中田正義であったとしても波風を立てずにはいないだろう。俺はリチャードと一緒にイタリアの古都を見て回れるのを楽しみにしていたのに。いやそれは私人中田正義としての感傷であって今一番大事にすべきことでは無い。でも今一番大事にしたいと思っている上司が俺を置いていったのに。頭の中はそんなんだろう？　俺が一番大事に俺って一体何なんだ江戸時代の狂歌か何かだったっけ。混乱しているよ。それにつけても時差ぼけのひどいよ。いやこれは江戸時代の狂歌も意味がある気がする。まるで首筋を鬱屈の黒いもやもやに、丁寧に愛撫されているような気だ。風邪でもひいたのだろうか。

「……あの、大丈夫ですか？」

不意に誰かが俺の肩に手を置いた。

占い建物の居並ぶ街を、意味もなくぐるぐると彷徨っていた時。

「日本の方ですか？」ひょっとして。

そんな表情をしている。東アジアの顔立ちだ。

空手をする時の顔で振り向くと、立っていたのは柿色のシャツを着た青年だった。温和な穏やかな美語だった。新手の大道芸か、スリか、それともひったくりのジャブか。

俺が問うと、彼はちょっと驚いた顔で笑って、はいと日本語で告げた。二十代になったばかりの年格好に見える。なのに彼は何故か、俺の日本語に、懐かしそうに目を細めた。何十年も日本に戻っていない海外在留者が、俺と喋る時に見せる顔そっくりに。

「いまなり虚をかけてしまってすみません。さっきから同じところを回っているようにうに見えて……道に迷われたのかなって」

と冷静に付け加えた。早く言ってね。

「眼瞼痙攣を伴見。あー、ちょっと貧血かもしれないですね」

彼は俺の腕をとり、腕時計の針を見ながら脈拍を確認し、お医者さんらしい質問を投げてきた。昨日何食べましたっけ？　今日の朝食はとりましたか？　香水をつけていると、体からはふわっといいかおりがする。昨日は飛行機の中で、今朝はあわただしく出ていくリチャードを見送るのに忙しくて、俺は食事をとった覚えがない。思い出したようにお腹がぐう、と鳴る。お恥ずかしい。

ガビーさんは笑い、再び店のメニューを取ってくれたが、中を見て顔をしかめた。

「ボッタくるな……最近できた店だから、どんなものかと思ってた」

「うーん、この辺はあんまりよくないかもしれない」

「中田サン、ごーにー、で通じないか。サンドイッチでいいですか。近くにいい店があるんです。安くてうまい。歩かせるのは申し訳ないので、ここで待っててください」

いやいやいや、『申し訳ない』はこっちの台詞である。さらさらしているとこころを助けてもらって、無料検診みたいなことまでしてもらった上、今度はバニーニのデリバリーである。旅先でこんなふうにいきなり人情に触れまくると参ってしまう。

しかし不安になっているような間もなく、俺の携帯端末はメッセージを受信した。

差出人はリチャード。

『今朝は申し訳ありませんでした』

『せっかくの機会です。フィレンツェを満喫してください』

『こちらは快適に過ごしております。どうぞご心配なく』

俺の口はへの字になった。位置情報、なし。今朝のことの説明、なし。『こちらは快適に過ごしております』。ふーんという感じである。

俺のムードが暗くなったことに気づいたのか、加藤さんは心配そうな顔をしてくれた。

「どうしましたか」

「いえ。仕事の連絡でした。大したことじゃありません」

と言ってから、俺は自分で自分の言葉にダメージを受けた。リチャードからの連絡である。それを『大したことじゃありません』とは何事だ。やっぱり今日の俺は少しおかしい。熱中症と寝不足と貧血が全部一緒に襲い掛かってくるという近年まれに見るバッドステータス――この言い方はヴィンスさんに習った――状態とはいえ、こんな俺は俺じゃないような気がする。

こんな時にリチャードがいてくれたら。

電話をかけてみようか。いやだめだ。自分が何をするのか想像がつかない。もし所在地

「ああっ、おつかれ……何か今日は、食べられたか？」
「オーガニック食品を、それはもう、たくさん……」
リチャードは少し猫背になり、口元をおさえた。もっと食べろ、いっぱい食べろ、痩せてるから食べろの攻撃を喰らった可能性が高い。
「寝ろ！　とにかく今日はもう寝ろ！　明日からのことは明日考えよう」
「お待ちを」
荷物を奪い取り、ホテルの中に入ろうとする俺の服を、リチャードが背後からつかんだ。振り向くと美貌の男は、宵闇の中で郷愁の滲む表情を浮かべていた。映画館の大画面で見たいような顔だ。いや、見たくない。あまりにも感情が滲みすぎて、まるで転んで切れた皮膚の間から滲む、真っ赤な血を見るような気分だ。
リチャードは苦悶の表情を浮かべたまま喋った。
「今朝……私はあなたにとてもひどいことを申し上げました。メッセージをいれる暇もありませんでしたが、今日は一日そのことばかりを考えていました。お詫びさせてください。今日はあなたとフィレンツェで過ごす予定であったというのに、一方的に飛び出してしまった件も、本当に何と言ったらいいのか……」
「たぶんだけど、俺のこと守ろうとしてくれたんだろ」
リチャードは言葉を呑み込み、まじまじと俺を見た。どこからか情報を入手したのかとでも言いたげな顔である。ビンゴであったらしい。俺はため息をついた。

そしておそらくリチャードは、あんな姿をビジネス上のみの関係の相手には見せないだろう。いやっこれは『おそらく』ではなく『絶対』だ。
そうか、今朝俺はリチャードに『甘えられた』のか。
そう考えると、何だかあたたかな充足感が胸の奥からこみあげてくる。自慢でも何でもないが、俺はリチャードの七つ道具に、いきつけの食堂に、サンドイッチやスープ、ジャンクフードもなりたいと思っている人間である。リチャードのあらゆるリクエストに思われる人間でありたい。そういうことをするに足る存在であると、リチャードに思われる人間であるのであれば、俺の今までの努力の成果というこもできるのではないだろうか。
唇のあたりがにまにましてしまう。一人でにやけているのは不気味だ。すみませんと俺が謝罪すると、いいえと加藤さんは笑ってくれた。元気が出たみたいでよかったです、と彼は言葉にはしないだが、そういう笑顔だった。まったく「おかげさま」という日本語は、っていう時のためにあるのだろう。
旧市街の土色の煉瓦のどこからか、ガビーさんが姿を現したのはその時だった。紙の袋を右手に掲げて。
「ガビー、ありがとう」
「中田サン、ハムチーズと、サルシッチャと、イワシがタールだったら、どのパンがいいです

あるだろう。昔の自分を見ているような気がする。
「今日はちょっと、ついてない日で」
「ついてない日、ですか」
「もちろん、加藤さんたちにお会いできたのはすごく嬉しかったんですけど」
俺は適当な愛想笑いを浮かべながら、言葉を探した。リチャードに置いて行かれてつらかったんです。これをできる限り、初対面の他人にも理解できるようなマイルドさで伝えなければならない。いや別に伝える義務も義理もないのだが、俺は正直に話したいと思っている。他でもない俺のために。
取り繕うのが難しくなってきて、俺は口を開いた。
「俺の……上司が……俺を置いて行っちゃったんです」
最後のあたりが小学生の愚痴みたいになった。『置いて行っちゃったんです』って何だ。自分で少しおかしかったが、加藤さんは笑わずに、そうなんですねと頷いてくれた。この人の存在は不思議だ。自分自身の重さを、少し軽くしてくれる作用がある気がする。そして俺より年下に見えるのに、何故か年を経たおじいさんと一緒にいるような気分にもなる。どこまでも落ち着いているのだ。俺が目の前で取り乱しても、この人は泰然としている気がする。
加藤さんの存在に甘え、俺は笑いながら次々に言葉を取り出した。今日の本来の予定のこと。朝のこと。置いて行かれた気分のこと。無力感。さびしさ。こんなつまらないことも信頼して いらっしゃるんですね」
「はい。それは、そう思います」
「なるほど、その方も中田さんのことを、心の底から頼りにしていらっしゃると思います」
加藤さんは微笑んでくれた。そうだったらいいなあとは思いますけどね、と俺が微笑み返すと、彼は言葉を重ねた。
「だからこそ、なんじゃないでしょうか。いつもだったら詳しく説明するようなことも、『この人なら許してくれるだろう』『この人ならわかってくれるだろう』って、そう思われたのかもしれませんね。もちろんお忙しかったせいもあるとは思いますが……親しくなってきたからこそ、あなたに甘えたいと思われたのかもしれませんよ」
さと。
俺は今朝のリチャードの姿を思い出した。慌ただしく身支度を整え、俺に背中で言い置いて、さっさとホテルを出てゆく姿を。
今まで一度も、リチャードのあんな姿は見たことがない。

で悩んでるなんておかしいでしょう、とプレゼンするように、その実かなり真剣に。
『やっぱりいい』って……何だよ『やっぱりいい』って……俺はそんな……その程度の相手だったのかよ。そのへんに捨ててあるティッシュみたいに『やっぱりいい』ってほったらかしてもいいものだったのかよ……もっとこう……こう……」
俺は両腕で、目の前にもわもわした何かを描いた。
「俺は大きい存在になりたかったのになあ」
「大きい存在、ですか」
「……わかってるんです。あいつが俺のこと適当に扱ったりするような相手じゃないことも、言葉が足りなかったことも。今日はきっと、何か差し迫った都合があって、俺に説明するような余裕もなくて、仕方なくああなったんだろうって……ただ……」
ただ今日は、それが。
「……それが、堪えただけで」
「そうなんですね」
「ほんと、不思議なくらいなんですが……俺、いつもはもっと明るいんです。ただちょっと今が特別なだけで……」
「そういうこと、あります」
「そういうこと、ありますね」
「そうなんです……変な奴だなとかまられるんです。だからちゃんと守りたいのに……でもあいつは、スーパーマンみたいなやつだから、俺がいなくても大丈夫なんです。それはわかってるんです……でも……」
俺はしばらく黙ってから、絞り出すように呟いた。
「いつもみたいに、説明してくれたらよかったのに……」
それに尽きる。
言葉にしてしまえば、限りなくチープである。俺は一体何をこんなにクヨクヨしていたんだろう。忙しくて説明できなかっただけで、別にリチャードが俺を段ボール箱にいれて持っていったわけでは決してないのに。そもそも俺はボールに詰められてどこかへ運ばれたのこのことはでき過ぎ人間だ。
コンデイションが悪いと、こういう不条理にも見舞われる。

「嫌な顧客が無茶ぶりをしてきたから怒いでいかなきゃならないんだ』くらいでいいから言ってほしかった……ああ、もし本当にそんなことになっていたらどうしよう……うーん。想像するだけでつらい」
「あまり想像しない方がいいです」
「でも、俺の上司、ものすごい美人で……もう、『人間やめてます』ってレベルで」
「あはは、まじに、いますよね、そういう『人間やめてる』タイプが」
「そうなんです……変な奴だなとまにかられるんです。だからちゃんと守りたいのに……でもあいつは、スーパーマンみたいなやつだから、俺がいなくても大丈夫なんです。それはわかってるんです……でも……」
俺はしばらく黙ってから、絞り出すように呟いた。
「いつもみたいに、説明してくれたらよかったのに……」
それに尽きる。
言葉にしてしまえば、限りなくチープである。俺は一体何をこんなにクヨクヨしていたんだろう。忙しくて説明できなかっただけで、別にリチャードが俺を段ボール箱にいれて持っていったわけでは決してないのに。そもそも俺はボールに詰められてどこかへ運ばれたのこのことはでき過ぎ人間だ。
コンデイションが悪いと、こういう不条理にも見舞われる。

「……徒歩十キロメートル単位で……」
「大丈夫か。農園だもんな。歩き回ったのか」
「彼は……非常に……農作業に熱意を注いでいる人間で……」
ラさせながら、リチャードに伝統的な農法のすばらしさを語ったという。
絶対に来いと無茶を言い、強制的に彼の『農園』を訪問させたそうだ。そして目をキラキ
どういうルートか、リチャードがイタリアにやってくることを知った彼は、是非来い、
兄弟にあたる。名前だけは知っている人だったが、フィレンツェの近郊に住んでいたのか。
住で、通称『ダビデ王』。れっきとしたクレアモント家の一員で、リチャードのお父さんの
そしてリチャードは、デイヴィッドという名の伯父さんの話をしてくれた。イタリア在
「ご記憶にあるかどうか、定かではありませんが」
そしてリチャード、今朝急に飛び出していったのって……」
「なあリチャード、今朝急に飛び出していったのって……」
もしかして、これは本当に。
放り込まれている。
されましたという感じの統一感のない袋である。そして中には、瓶類や野菜がそのまんま
袋になって、左右の腕にぶらさがっている。田舎のおばあちゃんに農作物をいっぱい持た
リヤカーか何かで運ぶべきではないのかというくらいの荷物が、数えきれないほどの紙
……ほかにはチーズ……そういったものを……」
「主にワインとオリーブオイルです。あとは野菜ですね。アーティーチョークやきのこなど

か？」
俺は笑いそうになった。がビーさんは体の大きい人である。観光客に押されて、俺と加藤さんを見守っているとっと引っ張られてしまいそうになって、慌てて壁の後ろに戻った思ってくれたのだろう。
もしかしたらこの人たちは本当に、医療関係者なのかもしれない。もしそうならイタリアに暮らす日系人の人にはとてもありがたい存在になるのだろう。
元気になった俺は、急に若者を応援する年上のお兄さんの気分になって、俺は笑った。
「ありがとうございます。何でもおいしくいただきます。あと、差し出がましいんですが、住所を教えていただけますか。そのうち何か、お返しをさせていただきたいので」
その夜、九時。まだまだ宵の口という雰囲気で歩き回る人々の中をぬって、俺の上司は戻ってきた。ホテルの前で俺が待っているのを見つけると、リチャードは速足でたどりつき、慌てた顔で走ってきた。俺がパチクリ公かが何かに見えたのかもしれない。
「……大変、帰りが、遅くなりました」
「大丈夫か？　うわ、その荷物は何なんだ」

並んで包丁をふるっている風景。ガビーさんとリチャードのチェスの勝負。ついでにスリランカの社宅や、ジローとサブローの写真に、ほんの少しだけ『最近の日本』の様子も。

あの日のことは、思い出すだけで心がうきうきする。

また彼らに会いたい。でも旅の出会いが一期一会であることもわかっている。

俺は封筒を糊付けし、郵便局へ向かった。カウンターで海外便用の受付をして、とびっきりきれいな記念切手を貼ってもらおう。ありったけの『ありがとう』の気持ちを込めて。

もう二度と会えないかもしれない人たちに、せめてこの思いが届きますように。

「いただけません、こんな高級なもの……」

「最寄のスーパーには卸してもいないんだぞ、高すぎて売れないから」

「そうなんですか？　でも、どうせ持って帰れないので」

「その通りです」

リチャードがいと前に出ると、二人は再びひるんだ。しかし嫌な顔をするのでもなく、どこか申し訳なさそうな顔をするのが面白くて、俺は笑ってしまいそうになった。

「この部屋はガビーさんのお部屋だそうですが、隣にあるお嬢さんのお部屋には、キッチン設備はありません」

「小さいものなら、あります……」

「よろしければ少しお借りです。それでみんなで食べるやゃ、終わりになるでしょう」

「お客さまにお料理してもらうなんて申し訳ないです。俺も幾ら か料理はします」

「こいつのフリッタータは一生に一回は食べておいた方がいい」

「がビー、ハーモニーは上げないで」

「気にしないでください。料理は俺の趣味なんです。よければ ご一緒に」

ファスタみたな、とガビーさんがはそうだ吹いた。フェスタ ですね、とリチャードも受け かっ

『パーティ』です」

「ただの勘だよ。今更だけどさ、お前には俺が赤ん坊にでも見えるのかよ」

「そのようなことは決して。ただ彼は……アジア人とみると……」

「ああ、そういう感じか」

「違います。とにかく自分のカラテを披露したくてたまらなくなって」

「え？　なら、ちょうどいいんじゃないか。俺、空手好きだし」

「何度も無茶をして骨折しているのです……」

ああっ。それは駄目だ。仮にもリチャードのお父さんと同世代というのであれば、あまり無茶をすべきではない年頃だろう。そして俺はかなりシンプルな人間なので、空手の話題になったら盛り上がってしまうのは目に見えている。おいそれと顔を合わせるべきではない。

そのあたりのことを朝説明してくれたら、俺は爆笑しながらリチャードを送りだせたと思うのだが。

まあ、今となっては、そんなことはいい。

うなだれた顔をするリチャードに、俺は微笑みかけた。

「おつかれ。とりあえずホテルの中に入ろう。くたくただろ」

「しかし……やはりあなたにお詫びを」

「いいから」

ニョーリどうぞおはいりください、とドアマンに促され、俺たちはホテルに入り、三

俺の後ろからひょっこりとリチャードが姿を現した時のリアクションは、驚くべきものだった。

加藤さんは何故かガビーさんを背中にかばい、ガビーさんは「パチカンに連絡を」というトンとような挙動不審だ。やはりクワッタ美術館の近郊に暮らしていたりすると、『美』に対する感受性がとっこんとがったのだろうか。

さすがのリチャードも眉間に皺を寄せる頃になると、二人は我に返り、ちゃちゃまんで「取り乱しました……」

「悪かった。俺たちは『けた外れの美人』に、多少のトラウマが……」

「ガビー。その、そちらの方が、知人に少しだけ似ていたので……」

という ことはこの世の中に二人、リチャードが並みの美貌の持ち主がいるということになる。驚きの情報だ。ひょっとしてカトリーヌさんの縁戚関係の方でもいるのだろうか。と んな人なんだろう。

しかしさすがの宝石商である。リチャードは何も気にしていないような素振りと、流麗な笑顔を見せ、二人に大量のワイン オリーブオイルとチーズと農作物各種を差し出した。あまりの分量にガビーさんは笑っていた。だが『キンダ・ザイケツィン・ワイーム』という印に気が付くと、二人は目を丸くした。

階の部屋に引き下がった。何が何でも謝罪したがる頑固なリチャード氏を言いくるめ、なだめすかし、どうにか風呂に叩きこみ、俺は紙袋の中身を確認した。見事に生ものばかりである。長距離フライトでやってきた人間に、一体これをどうやって持ち帰れというのだろう。

ぐんにゃりした状態で戻ってきたパジャマのリチャードは、まだ申し訳なさそうな顔をしている。俺は呆(あき)れそうになったが、朝の自分の悲嘆を思い出し、苦笑いを浮かべた。

『全然気にしてない』って言ったらウソになるけどな、一周回って嬉しくなったよ。前はそんな顔、全然見せてくれなかっただろ」

「……しかし」

「嬉しかったよ」

リチャードはしばらく黙り込んだあと、ほろ苦い笑みを浮かべてみせた。

「……あなたは、みるみるうちに逞しくなってゆく」

俺は肩をすくめた。

「もう気にするなよ。結果オーライだったしさ。今日はいい人にも巡り合えたし」

「……『いい人』？」

「あや、いい人だったなあ」

「……どのような方です？」

「明日話すよ。心が晴れ晴れって感じだ。本当にいい人だったな」

「正義……」

「明日、明日」

見るからに不服そうな顔でついてくるリチャードに、俺はくるりと向き直り、にっこり笑った。多少、人の悪い顔で。

「言ってただろ。『全然気にしてない』わけじゃないって」

「……」

「おかえし」

俺はおぼえたのウィンクをして、リチャードに手を振り、隣部屋へと戻った。

ワイドハンツ目市街は猫の額ほどの狭い街区である。『お返し』の機会は思っていたより早くおとずれた。

あくる日、一日オフになったリチャードを伴って、俺は加藤さんとガビーさんが住んでいるというシティビューを訪れた。彼らのホテルのように、彼らは隣同士の部屋に住んでいるもろいい。若い男の子二人の暮らしである、散らかり放題だろうと思ったのだが、二人の部屋は片付いていた。もしかしたら近く引っ越しでもするテ定なのかもしれない。

それより何より。

「こんにちは。リチャードと申します」

俺の心を読んだように、微笑む加藤さんは教えてくれた。やっぱりこの人の傍にいると落ち着く。

二つの部屋を繋ぐバルコニーから、四人で運んでもまだ余る食料品を搬入し、加藤さんの部屋にお邪魔して、俺たちは『フェスタ』の準備に取り掛かった。俺は食料品のチェック、調理器具の場所を教えてくれる加藤さん、ガビーさんは銀色のコーヒーメーカーの準備、リチャードは開き直ったように椅子に腰かけるだけ。それがいい。適材適所というものがある。

「ところで、差し支えなければお尋ねしたいのですが」

俺が加藤さんに借りたエプロンをしめたところで、椅子の上のリチャードが声をあげた。声色はけだるく、甘く、何故だろう、飛び掛かってくる直前の野生動物のような、背筋の粟立つようなムードがある。

「昨日私の部下と出会った『いい人』というのは、どちらのお方のことでしょうか？　なぜかなぜか御礼をさせていただければ、裏心から嬉しく存じます」

そういってリチャードは、にっこりと笑った。満月のような微笑だった。煌々と照り映えていながら、どこかに闇があって、吸血鬼のように妖しい。

美貌の人間にトラウマがあるという二人は、もらと顔を見合わせた後、揃って相手のことを指さした。

日本に帰国した後、俺は加藤さんたちに連絡をとろうとして、メールアドレスもメッセージアプリのＩＤも尋ねていなかったことを思い出した。今どき珍しくそういう話題にならなかったのだ。どちらかというと自分のほうが「そのＳＮＳはやっていないんです」と断ることが多いタイプだったので、そういう情報交換にこだわらない人に出会ったことが新鮮だった。とはいえ住所はわかっている。こういう時に頼りになるのは、やはり昔ながらの郵便だ。

でも。

何故かその時、俺は不思議な予感をおぼえた。この手紙は届かないかもしれない。それどころかフィレンツェのあの場所には、もう加藤さんもガビーさんも暮らしていないかもしれない。あの物の少ない部屋は、二人が引っ越しをする前兆というよりも、転居を繰り返しているためで、俺たちは偶然、普段ならば出会うこともできない人たちに、偶然出くわしただけなのではないかと。

根拠も何もないただの予感だった。リチャードに話すようなことでもないだろう。俺はデスクワーク用の書き物机の上で、加藤さんとガビーさんへのお礼の手紙をしたため、フィレンツェの住所を丁寧に書き、写真店でプリントアウトした『フェスタ』の写真を同封した。

俺の作ったフィレンツェ風肉じゃがや、加藤さんのフリッタータなど、小さなテーブルに所狭しと乗った料理の写真。珍しくコーヒーを楽しむリチャードの写真。俺と加藤さんが